

さいと

「彩」はかがやき、「都」は都市の意。
 人がかがやき、まちがかがやき、
 都市が彩られていく。
 そんな都市・福岡のイメージを表す。



- 1 エルガーラバサージュ広場
- 2 地行中央公園
- 3 あいれふ前
- 4 水上公園
- 5 アクロス福岡前
- 6 福岡市立総合図書館前
- 7 福岡銀行本店

特集

まちを彩る演出家達

道、建物、緑、橋、水辺、公園、オブジェ…まちはさまざまなもので構成されている。

日常生活の中にすっぽり包まれ、特別目に付かないものもたくさんあるけれど、

福岡のまちの魅力づくりにとても大事な役割をもっているはず。

ときには、まちを彩る演出家たちを気にしながら、福岡をあるいてみてはどうだろう…。



CONTENTS

特集 まちを彩る演出家達	1
第15回 福岡市都市景観賞受賞作品	7
第5回 福岡市景観エッセー	12
都市景観室事業・編集後記	14

8 地下街岩田屋入口前	10	9	8
9 JR博多駅博多口前			
10 中央区役所			
11 西鉄グランドホテル前	13	12	
12 あいれふ橋			11
13 中洲那珂川沿い			
14 西鉄高宮駅前	16	15	14
15 姪浜駅前南側広場			
16 JR博多駅筑紫口			



ARTISTIC SCENE ON THE STREET



都市景観が私たちに送るメッセージ

私たちは、毎日、家を出て、通い慣れた道を通って会社や学校へ向かう。習い事や仲のいい友人宅へ訪れるために通る道もあるかもしれない。馴染みのお店に買い物に出かけるとき、通過する道もあるだろう。こうして考えてみると、結構、まちの中をあちこちと歩き回っているものだ。でも、まちの景観にはそれほど注意して歩いてはいない。新しい店ができたなどが、あそこに公園があったな、ぐらいいのことは思いつくが、わざわざ立ち止まり、じっくり眺め回すことはない。だと実には、まちの景観は静かに様々なメッセージを私たちに語りかけている。

街角にある彫刻やモニュメント。駅前の広場や通りのベンチに腰掛ける彫刻。人々はあたりまえのように隣に座り、時には無言のまま言葉を交わしているかもしれない。ここでは、まちの景観と人とのコミュニケーションが成立している。そして景観とのコミュニケーションが、人々の心の



GREEN SPACE IN THE TOWN



をほんのちよっぴり揺り動かす。

もちろん、彫刻だけがメッセージを送っているわけではない。その場所を通過する、立ち止まる、くつろぐ人々が、思い思いに時を過ごしてもらえるように作られた空間があるのだ。

天神のと真ん中はオフィスビルが際間もなく埋め尽くしている。通りは車と人ごみでごった返し、落ち着く場所もないような気がする。でも、そんな中、別世界に吸い込まれたような空間がある。オフィスビルの一角につくられたその空間には、小さな森のように木々が茂り、数体の彫刻が佇む。水が静かにたたえられ、気ままに座って休めるベンチが備えられている。そこから一歩出れば都会の喧噪が待ち受けているとは信じられない。まさに都会のオアシスなのだ。時間も忘れあくせく行き来する急いだ気持ちを、一瞬でもいい、落ち着けてほしいという思いで、そんな場所が設けられているのだろうか。

あるいは、街角の花壇や公園のベンチ。この場所にたたずんで、私たちは風を感じ、光を感じ、美しさや香り、季節を感じる。そして、水のある空間。絶え間なく流れる水の音。まるで音



MANHOLE COVER WATER SPACE



楽を奏でるような噴水のしずく。ダイナミックな水と光と音の演出。私たちはここで、人間の五感のすべてを使って、景観を楽しむことができる。そんな空間の演出があることで、私たちは安堵感を覚えたり、あるいはエネルギーをもらったたり、都会の中から様々な力や安らぎを与えられているのではないだろうか。

足元に目を移してみよう。道端にはありとあらゆる形のマンホールがある。歩道の舗装と一体化したもの、花や鳥がデザインされたもの。普段全く気づかない小さなものだけに、こんな所にも景観への配慮が感じられる。

橋のデザインに目を向けたことがあるだろうか。福岡には多くの橋があるが、デザインはそれぞれに異なっている。どれもまわりの景観を生かし、響きあうようにつくられている。ときには、人々の暮らし、祭りや歴史など、そのまちが紡いできた物語をモチーフに創られたものもある。橋のデザインがそのまちを物語っている。そんな橋であれば渡るときに、その橋が語りかけているものに耳を傾



A PRECIOUS RELIC OF THE PAST



けてみたくもなるだろう。そして、自分の住むまちにあれば、物語を語り継ぐものとして、いつまでも大切に横を守っていくだろう。

景観とは、そのまちの風土や歴史、文化と切りはなしては存在し得ない。長い時間を経て、そこに住む人々が景観をつくりあげてきた。博多のまちにわずかに残っている昔ながらの古いまち並み。町家、神社の佇まい、博多ならではの博多堀。単に古さや懐かしさだけではない、地域の人々に愛され、大切に残されてきた景観がそこにある。このまちがこれからどう変化していくとも、その根っこにはまちの歴史を物語るものが、常にモチーフとして、このまちに魅力を添えていくことだろう。

夜を迎えようとするまちが、装いを変え、昼間と違う表情を見せてくれる。ライトアップされた建物は、まるで別の建物を見ているような錯覚をもたらし、川面に揺れるネオンの光水辺に映る屋台の提灯が夜のまちを彩る。都心のヨーロッパウィンドウは時代の最先端を教えてくれるし、イル



THE BRILLIANT ILLUMINATIONS



ミネーションは、いやが上にも道行く人々の心華やいだ気分を盛り上げてくれる。夜の表情もまた、私たちの記憶の中に光の景観として刻み込まれていく。

演 出家達に囲まれて

多彩な表情を見せる景観

景観の中で、小さな感動を与えてくれるまちの演出家たち。それらは景観づくりに関わってきた作り手たちが、何らかの想いを込めてまちに送り出している。それは、まちの歴史かもしれない、忘れかけていた安らぎかもしれない、もしかしたらちょっとしたジョークかもしれない。そんな仕掛けがあることで、まちは鮮やかに思っていていく。もしもこれらがまちから消えてしまったらどうだろうか。無機質な建物だけが並ぶまち並から、私たちは何を感じとることができようか。そう考えると、これらのものはまちをなんと豊かに彩っていることだろう。演出家たちが都市景観に彩りを添え、景観の魅力を高めていけば、福岡のまちはもつともつと豊かな表情を私たちに見せてくれるだろう。